

最優秀賞

神奈川県教育長賞

APDと生きる

寒川町立旭が丘中学校

三年 中村 瑠花

私は、APD（聴覚処理障害）という障害を持っています。APDとは、聴覚には問題がなく、音を聞き取ることができませんが、音を言語に変換し、脳で処理して「話」の内容を理解することが難しい障害です。一対一で静かな場所で話しているときに症状が出ることは少ないのですが、雑踏の中にいるときや、複数から同時に声が聞こえてくる場合は、きちんと会話のキャッチボールをすることが難しいです。また、複雑な内容ではなくても相手の話を一度で正しく理解するのが苦手で、繰り返し説明をしてもらうことも多く、周囲にも迷惑を掛けてしまいます。

日本は、欧米と比べてAPDの認知度はとても低く、勇気を出して障害のことを話してみ

でも、理解されにくい状態だそうで、私も話した後の反応が怖くて同じ部活の信用できる数名にしか打ち明けていません。何度も聞き返したり、聞き間違いが多かったりして、周りには迷惑を掛けてしまうので、「障害のことをきちんと話したほうがいい」と両親や先生に言われているのですが、クラスメイトや部活の仲間と言うのは、やはり怖くてできませんでした。聞き間違いをしてしまう障害のせいで、小学生の時は、「天然な子」「抜けている子」と言われていました。

私は、病院でAPDだと診断されてから、くわしい症状や対策方法、治療について等、たくさんのことをインターネットで調べました。「聞き取りにくい」という症状が主となっていたこともあって、対策については周りの人の協力が必要不可欠だとどのサイトにも書いてありました。「確かにそうするしかないのかな」という同意の気持ちと、「どんな風に伝えればいいのだろう」という迷いがあって、不安ばかりが募りました。周りに相談するべきだと分かっているけど、反応が怖かったり、その後の関係性に不安を抱いてしまったりなどで周りに言うことができずに苦しむ患者さんは世界にたくさんいると思います。そこで私は、そんな悩みを持った人が生きやすくなるにはどうしたらいいのか考えてみました。一番大切だと思ったのは、周囲の人にその障害や病気の正しい知識を持ってもらい、その上でそれをその人の「個性」だと認めることだと思います。現代は、知りたいことがあればインターネットで簡単に情報を得ることができます。さらに、ジェンダーレスや考え方などはじめとした多様性に向かう時代です。なので、その症状を障害や病気ではなく、一つの「特徴」や「個性」

として受け止める姿勢を持つことが大切なのではないかと思えます。障害を持つ人自身も、「認めてもらえる」ということが分かっているれば、勇気をもって多くの人に相談をすることができるのではないかと思います。

私は授業内容や部活中に先生から指示が出されたときに言葉を聞き取ることができずに困ってしまうことが多々あります。ですが、事情を知る友達が聞き取れなかった部分を教えてくれて、なんとかみんなと同じように生活できています。

私は、APDという障害になって、会話をすることが難しく感じるようになりました。でも、会話が難しくなった代わりに人の優しさに敏感になれたように思います。事情を話した友達はもちろん、話せていない友達も、「分からない」というと私が理解するまで何度も説明してくれます。

私にとってAPDは、人の優しさを常に再認識させてくれる一つの「個性」です。困ることも多々あるのですが、そんな私と仲良くしてくれたり助けてくれたりする友達を大切にしたいし、その人が困っていたら私も何かしたいと思っています。

そんな気持ちを教えてくれたこの「個性」と、私は一緒に生きていきます。